

# 「基礎・基本の定着」と「主体的な学習態度の醸成」を目指した指導の実践

大仙市立西仙北西中学校 佐藤 敦

## 1. はじめに

### (1) 音楽科における「基礎・基本」とは

音楽科における「基礎・基本」とは、「音楽を主体的・創造的に楽しむ上で最低限必要とされる力」と解釈できる。この「力」とは、「能力・資質」という言葉に置き換えることができ、いわゆる「知識・理解・技能」や「興味・関心・意欲・態度」といった「学力」に結びつくものといえるだろう。

これらの「力」は表現活動をする上でのものと鑑賞活動をする上でのものに分けることができると考えられるが、実際にはこれらは密接に関連し合う部分が多く、それぞれを明確に分離することは難しい。こうした表現・鑑賞する力は共に各個人の音楽経験によって培われるものといえ、中学校におけるそれらの個人差は各自のそれまでの音楽的生活環境の違いによって生じるものといえるだろう。「基礎・基本」の定着を図る上で、こうした個人差を考慮するという事は非常に重要であると考えられる。

### (2) 「主体的な学習態度」を育てるために

音楽の学習における技能面での個人差は常に問題となる点であると考えられるが、こうした技能面での「基礎・基本」を定着させるために、教師側からの一方的指導ではなく、生徒たち自らが主体的な態度で学習を進めていけることが重要と考えられる。こうした態度を養う要素としては次のようなことが考えられる。

- ① 音楽活動の楽しさを生徒たちが皆平等に感受できる。
- ② 生徒たちが自ら目標（課題意識）を持って、活動できる。

①についてはこの後の項で具体的な指導方法の一案を提示したいと思うが、②については教師側の働き掛けや生徒たちに対する日頃の意識付けがその指導方法以上に重要であるように思われる。また、これらのことは主に表現活動において重要な要素と考えられるが、もちろん鑑賞活動においても共通する要素であるといえる。また、これらの要素を満たす活動はすなわち、先程述べた「基礎・基本」の個人差に対応する活動にもなり、個を生かす活動ともなりうるのではないかという推測もできる。

こうした主体的な学習態度を養うために、ここではアルトリコーダーによる表現活動を中心とした指導方法を提案してみたい。

## 2. 実践の実際

### ～アルトリコーダーを用いた表現活動～

#### (1) 取り上げる教材・楽曲の工夫

アルトリコーダーは多くの中学校で表現活動の手段として用いられていると思うが、1年生の初めてこの楽器を導入することにより、これまでソプラノリコーダーの学習で器楽に苦手意識を持っていた生徒も全員同じスタートを切ることができる。

出来ることなら、これをチャンスに全員に同じような楽しみ、成就感を与えたいと思うのだが、それには無理なく段階を追った練習を進めることができる教材・楽曲が必要であると思われる。そこで私は次のような作品を用いた学習活動を試みた。

譜例1 エチュードB【「新版 アルトリコーダーのステップ」(教育芸術社)より】



※C,D,E,F,Gの5音(左手)のみ、4分音符より短い音符は用いない。

これはいわゆるエチュードであるが、二声のカノンの形式をとっている。この形式自体、「退屈な基本練習」からの脱却を図ったものであるが、次のようなステップを踏んで練習していくことにより、更に生徒たちの意欲を高める指導が可能と考えられる。

① 階名唱をしてみる

この段階では5音しかなく、同音音型の反復が多いので階名唱は容易である。また、ここでの目的はリコーダーを吹くための基本的な読譜練習であるので、無理に音程をつけて歌わなくてもよいことにした方が、生徒は抵抗なくできるようであった。

② 階名唱しながら運指だけ練習してみる

テンポはなるべくゆっくり練習する。一音一音運指を確認しながらでよい。教師や生徒同士の支援が必要な場合もある。

③ 実際に吹いてみる

とりあえず1パートのみ反復練習する。最初はゆっくりから次第に速いテンポで練習するが、このときメトロノームを用いると視覚的にもテンポがつかみやすく、具体的なテンポが数値化・視覚化して認識できるため、「もっと速いテンポで」という意欲が高まるようである。また、電子オルガンなどの自動伴奏機能を用いると、様々なリズムヴァリエーションによって楽しみながら反復練習ができる。

④ カノンでアンサンブルしてみる

2パートは1パートとほとんど同じであるので(カノンだから当然ではあるが)、1パートが吹けるようになれば2パートも吹けるはずなのであるが、一旦1パートを主旋律と認識してしまうと、同じ旋律であっても1小節遅れて入ることに抵抗を感じる(うまく入れない)生徒がいるようである。そこで、1パートに慣れた生徒から自主的に2パートに移行させたほうが生徒たちには安心感があるようであった。これはあくまでもC,D,E,F,Gの5音の運指練習であるので、アンサンブルすることにこだわる必要はないだろう。

また、同じように易しい曲を用いたアンサンブルの例が以下の譜例である。

譜例2 「チューリップによるエチュード(1)【自作】



譜例3 「チューリップによるエチュード(2)【自作】



(1)は初めに紹介したエチュードと同じくカノンによるデュエットであるので、上記のような手順で一方のパートが演奏できるようになれば、比較的抵抗なくアンサンブルができると思われる。

一方(2)は主旋律を受け持つ1パートと対旋律(伴奏)の2パートというデュエットである。この段階でも、1パートが困難に感じる生徒があるということを考慮し、2パートは出来る限り平易にした。それでもまだ困難な場合を考え、更に易しい3パートを加えたのが次の譜例である。

譜例4 「チューリップによるエチュード(3)



譜例から分かるように、G音しか用いられていないこの3パートは、正にリコーダーの技能に関係なくアンサンブルの楽しさを味わわせるためのものである。

ただし、実際にグループアンサンブルに取り組ませると、生徒の多くはメロディの分からない(つまらない)パートより、難しくてもメロディを知っている(楽しい)パートを選ぼうとする傾向にあるようであった。これに対しては聞き覚えに頼らないような読譜指導と、どんなに平易なパートであってもアンサンブルに参加する喜びを味わおうとする態度を育てることが大切であろう。

いずれにしても、その生徒に合わせたパートを作っておくことは、生徒全員に対して平等に音楽活動の喜びを味わわせるという点では大切なことではないだろうか。

ちなみに以下も上記のものと同様の考え方でアレンジされた作品である。

譜例5 プンブンブン【「新版 アルトリコーダーのステップ」(教育芸術社)より】



## (2) グループアンサンブルの意義と課題

さて、今グループアンサンブルということにふれたが、ここではこの活動について考えてみたい。

前述した学級全体によるエチュードの練習の後、プンブンブン等のアンサンブル曲を任意のグループによって練習、発表させた。ただし、アンサンブルを初めからグループに任せたのは2年生のみであり、1年生には一通り各曲・各パートを全体指導してからグループ活動に移行させた。

私は3~4人のグループでこの活動をさせたが、まずそのメリットを挙げてみる。

- ① 全員に責任が生じるため、活動自体が主体的なものになりうる。
- ② 全員同様の成就感が得られる。
- ③ 互いのグループの演奏を鑑賞することにより、違いや良さに気付いたり、課題意識が高まったりする。

以上のような点は実は相反する課題・問題点も抱えているのだが、例えば①・②に関しては技能面で弱い生徒同士が同じグループになった場合、全く逆効果になりうる。これにはグループ作りの段階で技能面のバランスを十分考慮しなくては行けないし、先程ふれた「その生徒に合わせたパート」を与えるなどの

配慮も必要だろう。（ただし、どちらの場合も生徒のプライドを傷つけないようにするにはかなり気を遣う）

また、③に関しては鑑賞するポイント、つまりは練習する際に気を付けるポイントを事前に教師側が提示する必要があるだろう。（もちろん、教師が予測しない点を指摘する生徒も出てくると思うが、これは多めに褒めるべきだと思う）

### 3. 実践の成果

こうしたアルトリコーダーを用いた活動によって、ここでの提案の主旨である「基礎・基本を定着させるための主体的な学習活動を育てる」という点については、ある程度の効果を挙げたように感じている。

その具体的な効果については、前項で述べた内容と重複するのでここでの説明は省くが、最初に述べた「個人差」に対する配慮は、こうした表現活動における技能面の「基礎・基本」の定着を目指す上において、常に念頭に置く必要があるように思われる。

結果的にはその個人差を埋めていくことにはならないかも知れないが、各自にとっての基礎・基本を定着させるという目的においては、いわゆる主体的学習活動を育てるための意欲を高める（というよりも減退させないという消極的側面もあるが）指導の工夫が、前項で述べた指導方法・活動内容でもある程度感じられることと思う。

### 4. 今後の課題

これまで述べてきたことを振り返ってみた時、私自身が感じていることの一つに、「基本練習を楽しく行なう」ことの難しさがある。

ここで紹介したような教材・楽曲のように、それ自体が楽しみながら基礎を身に付けることをねらいとしているものもあるが、それでも反復することに勝る基礎練習の方法が無いのも事実であると思われる。せめて単純な反復練習にならないよう、前項で述べたような工夫をしたり、全体で練習したりしているわけだが（反復練習は一人より多人数でやったほうが良いと思う）、むしろ基本練習無しで、生徒たちが「演奏したい」と思うような曲をどんどん取り上げた方が意欲的・主体的に生徒は向かうかも知れない。ただ、技能面での個人差は逆に広がるような気がしてそれは出来ないでいる。

とても簡単で、でも生徒誰もが「演奏したい」と思うような魅力を持ち、なおかつ知らないうちに基本技能が身に付くような作品の発掘・開発を今後の課題とし、研究を続けていきたい。